蒼空

日本ウイグル協会会報

2011年1月1日　第6号

写真：黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会登壇者。
左上から時計回りに、神奈川県議会議員・日本会議議員連盟会長 松田 良昭氏、神奈川県議会議員 小島 健一氏、チベット文化研究所所長・横浜桐蔭大学教授 ペマ ギャルポ氏、評論家・ジャーナリスト 西村 幸祐氏、評論家・拓殖大学客員教授 石 平氏、ノンフィクション作家・拓殖大学客員教授 関岡 英之氏、東京都議会議員 吉田 康一郎氏、ジャーナリスト 山際 澄夫氏。（登壇順）
左下は開会挨拶を述べるイリハム会長。

目次

表紙　1頁
謹賀新年　2頁
協会活動報告２０１０秋冬　3頁
二つの「新シルクロード構想」　6頁
ウイグルと仏教について概説　8頁
書籍紹介　10頁
黙殺される真実をＡＰＥＣに問う
　平和集会レポート　11頁
ウイグル料理紹介　12頁
編集後記

謹　賀　新　年

会員の皆様、明けましておめでとうございます。

昨年も、皆様のお陰でウイグル運動を幅広く宣伝する事が出来ました。協会にとって、昨年行った、一番大事なことの内の一つに、事務所の立ち上げがあると思います。

もちろん今の経済状況で事務所を存続してゆくことは、協会にとって大変苦しいことですが、ウイグル問題をもっと広めるための拠点として、どうしても必要と判断したことでございます。

協会はまだ規模も小さく、歳入も安定しておりませんので、事務所の経費は、イベントの収入や、ビラ配りの際の募金などいう手段で確保することになります。これら資金の確保という点が、今年の重要な課題の一つになると思います。

一昨年に続き昨年も東京の他、沖縄県、香川県、栃木県、神奈川県と広島県で活動が出来ました。尖閣諸島事件の影響もあり、再びウイグル問題が注目されることにもなりました。このチャンスを生かすために、理事の皆さん始め会員の方々とボランティアの皆さんの大変な努力を頂きましたことを、この場をお借りして感謝申し上げたいと思います。有難う御座いました。

ウイグルの現状は７．５ウルムチ事件の前よりも酷くなっています。そのため今年の春頃、世界各国にいるウイグル人による緊急会議を、アメリカのワシントンＤＣで行う予定です。

今大会は考え方を問わず、各分野からさまざまな人々が集まり、話し合う事によって、ウイグル運動の新しい方針を決定することを目的としています。

今年も、ウイグルの人々にとって、さらに厳しい一年になることが予想されます。ウイグルの人々のため、日本のためにも、皆さんと一緒に頑張って参りたいと思います。

どうか皆さん、本年も宜しくお願いいたします。

2011 年　元日

世界ウイグル会議日本全権代表
日本ウイグル協会会長
イリハム・マハムティ

協会活動報告２０１０秋冬（１）

中華人民共和国建国６１周年にあわせ声明を発表

１０月１日、中華人民共和国建国の日にあわせ、声明を発表致しました。ここにその全文を掲載致します。

中華人民共和国建国６１周年に際しての日本ウイグル協会声明文

私達、日本ウイグル協会は、中華人民共和国６１周年を経過した、本日１０月１日、改めて中国政府が今まで行ってきた凶行に対し、強く抗議の意志を示し、この日本から全てのウイグル人に強く連帯することを宣言するべく、声明文を発表致します。

中国政府の手によって、東トルキスタンが侵略されてから６１年の月日が経過し、「新疆ウイグル自治区」が設置されてから５５年が経過しました。この間、ウイグル人は、大躍進政策や文化大革命、核実験、さらにはあらゆる民族浄化政策に晒され、多くの罪のないウイグル人の命が失われました。それは、１９４９年のウイグル侵攻、そして１９５５年の自治区成立、そして現在に至るまで、ウイグル人にとって「悪夢」のような月日でありました。

しかし、今もなお、その悪夢からウイグル人が解放される状況には至っていません。止むことのない民族浄化政策の波は、本来享受されるべきウイグル人の人権、そして育んできた文化を確実に飲み込もうとしています。

今回は、敢えてウイグル人に連帯するという宣言や、中国政府への抗議の意を込めるだけではなく、全ての日本国民に対しても、このメッセージを送りたいと思います。

私達は、一人でも多くの日本国民に、「祖国」を失い、人間として生きていくことすら儘ならないウイグル人の苦難の歴史に触れ、民族の文化や言葉、歴史、そして未来を守ることの重要さ、尊さを再認識して頂きたいと考えております。なぜなら、この認識が広く日本中に広がっていき、それを大きな世論にしていくことで、遠く離れたこの日本からでも、「中国の手によって、ウイグルが歴史から抹消されることを防ぐことが出来る」と、強く確信をしているからであります。

1949 年 10 月 1 日、北京・天安門にて建国を宣言する毛沢東。ただし国共内戦の終結は、さらに後の事である。

（画像：Wikipedia）

私達、日本ウイグル協会は今後においても、中国政府によるウイグル人弾圧の真実を訴え続けて参ります。そして、ウイグル人と日本人が、世界観や宗教観を乗り越えて連帯し、自由と平和を希求する声が沸点を超えたとき、後世の歴史の審判を正しく受けるのは紛れもなく私達であると、確信しております。

最後になりますが、改めて中国政府に対し、強く抗議の意志を表明し、１９４９年からの６１年の間に、理不尽な形で命を落とした全てのウイグル人に心からの哀悼を申し上げ、日本ウイグル協会の声明文とさせていただきます。

２０１０年１０月１日

特定非営利活動法人　日本ウイグル協会

黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会

ＡＰＥＣ参加各国首脳が一堂に会する首脳会議に先立つ１１月６日、横浜情報文化センターにおいて、当協会の集会「黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会」を開催致しました。

会場では、まず Death on the Silk Road が上映され、さらに多くの先生方が登壇、お話を頂きました。

登壇者は、以下の方々です。

神奈川県議会議員・日本会議議員連盟会長
松田　良昭氏

神奈川県議会議員
小島　健一氏

協会活動報告２０１０夏秋（２）

チベット文化研究所所長・横浜桐蔭大学教授
ペマ ギャルポ氏
評論家・ジャーナリスト
西村 幸祐氏
評論家・拓殖大学客員教授
石 平氏
ノンフィクション作家・拓殖大学客員教授
関岡 英之氏
東京都議会議員
吉田 康一郎氏
ジャーナリスト
山際 澄夫氏

（登壇順）

先生方には、中国国内の現状をお話頂くと共に、中国に対する時には日本はいかに応じるべきか、またアジアの平和のために果たすべき日本の役割はいかなるものか、などを語って頂きました。

集会の最後に、黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会にあたっての決議文を、平和集会参加者に賛同して頂き、それをＡＰＥＣ参加国への要望文として各国大使館へ送付致しました。

黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会
にあたっての決議文

１１月１３日、１４日の両日に渡って、ＡＰＥＣ（アジア太平洋経済協力）の首脳会議が開催される。私達、「黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会」参加者一同は、この会議が、経済大国化した中国の民族問題、人権問題が黙殺された状況で行われようとしていることに大きな懸念を表明する。

ウイグル人が多数虐殺された２００９年７月のウルムチ事件。時を同じくしてイタリアでは、先進国首脳によるサミットが開催され、中国は胡錦濤国家主席が参加していた。しかし、胡主席は会期中にも関わらず、サミットを中座し緊急に帰国したのである。それが、ウルムチ事件の収拾の為であることは誰の目にも明らかであった。それにも関わらず、サミットにおいて先進国首脳の口から、中国国内の人権状況に対し、抗議の声はおろか、懸念の声が発せられることもなかった。

冷静な現状認識に立てば、国境を越えて資本が行き交うグローバルな経済状況を、闇雲に否定することは出来ない。しかし、国境を越えて利益を追求するビジネスが加速するのと呼応するように、「内政干渉」とは到底片付けることは出来ないウイグル問題を始めとする中国の人権問題に、世界の多くの国々が、中国との政治的対立を恐れ、又、自国の経済損失を恐れ、抗議の声を上げることの出来ない状況が醸成されてしまったことは紛れもない事実である。

私達、「黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会参加者」一同は、今回のＡＰＥＣにおいて、ＡＰＥＣ参加各国首脳が、以下の事項を中国に要求することを求め、ここに決議する。

1. ウイグル人を始めとする被抑圧民族の政治的、文化的、経済的な基本的人権と自由とを尊重すること。
2. 無実のウイグル人を始めとする被抑圧民族に対する不当逮捕をやめ、既に逮捕されている人々には公正な裁判を行うこと。
3. ウルムチ事件に対しての国際調査団を形成し、現地調査を行うこと。
4. テロとの戦いという口実で、ウイグル人の処刑が行われている現状に対し、それが本当にテロリストであるのか、公正な目で判断すること。
5. ウイグルにおける核実験の実態を明かし、被害者には保障を行うこと。

２０１０年１１月６日
黙殺される真実をＡＰＥＣに問う参加者一同

決議文読み上げの様子。参加者は拍手によって賛同の意を表し APEC 参加各国大使館に送られた。

2010/11/6

協会活動報告２０１０夏秋（３）

世界人権デー国連大学前集会

１２月１０日、世界人権デーであり、劉暁波氏ノーベル平和賞授賞式も行われたこの日、在日ビルマ人団体を中心に国連大学前で集会が行われ、当協会も参加致しました。

参加各団体のスピーチが行われ、協会からは、イリハム会長のスピーチと協会声明文の読み上げを行いました。

世界人権デーに際しての声明文

１９４８年、第３回国連総会において「人権に関する世界宣言」が採択されてから６２年目の本日を、私たちは深い憂慮とともに迎える。

同宣言によって高らかに謳いあげられた、すべての人が持っている筈の権利は、未だすべての人の手に行き渡ってはおらず、数多の良心と勇気とが目指した理想は、その多くが未だ理想のまま、遠く路の彼方にある。

東トルキスタンのウイグル人においてもまた同様である。

近くは２００９年６月、広東省の玩具工場に就業させられていたウイグル人らは、まるで家畜の如く棒で殴り殺された。

この事件の真相解明と、政府の適切な対応を求めたデモを行ったウルムチの人々は、ある者は軍や武装警察の銃弾に倒れ、ある者は捕らわれ、法に反した非公開の裁判によって裁かれ、そして処刑された。

恐怖と混乱の土地を離れ、遠くカンボジアの国連難民高等弁務官事務所まで逃れ、その保護下にあった筈の人々を待っていたのは、中国政府の手配による強制送還のチャーター機であった。

翌日、中国の国家副主席は、かねてからの予定通り、カンボジアに降り立ち、多額の援助を約束した。

これらは、１９４９年、中華人民共和国が成立して以降続く、人権蹂躙の歴史の１ページに過ぎない。人類社会を構成する、すべての人々が、真に人権を希求するのであれば、この歴史にもまた、ピリオドを打たねばならないと私たちは考える。

様々な立場、国籍、人種の人々が集い、人権アピールを行った国連大学前。

2010/12/10

よって私たちは、以下の通り宣言する。

私たちは、専制と圧迫、それらへの迎合に強く反対する。

私たちは、人が人として生きる権利を踏みにじるすべての論理を拒否する。

私たちは、私たちと同じ理想を共有するすべての人々と連帯する。

私たちは、絶対に希望を捨てない。

２０１０年１２月１０日

特定非営利活動法人　日本ウイグル協会

声明文を読み上げるイリハム会長。

2010/12/10

二つの「新シルクロード構想」（1）

多くの日本人にとって、「シルクロード」と聞けば、一度は訪れたい憧れの場所であるのかもしれない。しかし、そのシルクロードを舞台に、資源の獲得を第一義とした中国のユーラシア覇権拡大が始まっている。

それは、中国が主導しウイグルを含めた中央アジア全体、チベット、中国とは一定の距離を置いているはずのトルコ、さらにはヨーロッパ東端の各国にまで影響を及ぼすであろう、「新シルクロード構想」である。端的に言えば、ヒト（これは限定的）・モノ・カネの輸送網であり、鉄道や道路、資源を輸送するパイプラインを指す。現在のウイグル問題を解釈する上で避けては通れない重要な事柄であり、今回はこの問題を取り上げることにした。

中国が推し進めようとしている「新シルクロード構想」は一つに限定されるものではないが、代表的なものは、「新ユーラシア・ランド・ブリッジ構想」だ。この計画は、ウイグルと中央アジアを結ぶ程度のものではなく、江蘇省の連雲港を起点とし、鄭州、西安、蘭州、ウルムチを経由し、カザフスタンなどの中央アジア諸国を超え、さらにロシア、ベラルーシ、ポーランド、ドイツなどの国と地域を経由し、最後にオランダのロッテルダムに到達する壮大な計画である。既に、起点である連雲港からウイグルのホルゴスまでの高速道路は全線開通しており、この構想の中国における整備は完成していると言っても過言ではない。

「シルクロード」と言う響きから想起されるある種の郷愁などとは全く異なる計画が進められている。

最近の動きでは、９月下旬（時期に注目）に「中日新シルクロード企業協力フォーラム」が起点となる江蘇省の連雲港で開かれ、中国側が中国及び中央アジアの関連事業に日本企業を誘致すべく行われたことが、ごく僅かながら報道されている。

そしてもう一つは、中国紙が１１月１８日に、そして追うように産経新聞が１１月１９日付けで報じた「シルクロード鉄道構想」である。これは、ウイグルのカシュガルを起点とし、カザフスタン、キルギス、ウズベキスタンの中央アジア各国を経由してアフガニスタンを目指し、さらにイランを通り抜けてトルコのイスタンブールまで、乗り継ぎなしの国際鉄道路線を整備し、チベット、パキスタン、さらには東南アジア各国へも支線を延ばすという途方も無い計画である。その途方の無さ故、９０年代から語られては消える事を繰り返す構想であったが、中国が９月にイランに対し２０億ドルの鉄道整備費用を援助することが合意されてから事態は急展開を見せている。イランは、中国との合意後、トルコ、アフガニスタン、ウズベキスタンなどの鉄道網の建設に関する基本的な合意に取り付け、２０１１年早々にも中国とイランが主導した会議が開かれるという。

この件では、ウルムチからカザフスタン方面に抜ける鉄道網の整備がほぼ完了している。中国は２００９年４月にカザフスタンに１３０億ドルの支援を行ったが、これで２０１２年までの間にウイグルとカザフスタンを結ぶ鉄道網・道路網がほぼ完成することになる。さらに石油液化ガスの輸送については２０１０年６月に完成済で、そのルート中国は既に確保している。

２０１０年１２月、中国の民主活動家・劉暁波氏のノーベル平和賞授賞式の欠席した国々の中にカザフスタンが含まれていたのは当然の結果だろう。なぜなら、２００８年の世界的な金融危機以降、銀行の破たん、資金の王州引き上げが相次ぎ、ＣＩＳ加盟国の中でもっとも困窮したと言われるカザフスタンを、経済的に下支えしたのは中国だったからだ。カザフスタンが、中国の意志に反する行動を取れる訳がないのである。

こうした動きを、アメリカはどう見ているか。勿論、座視はしない。この「シルクロード鉄道構想」は、例え二義的な目的であったとしても、北朝鮮とイランが事実上一本のレールで繋がることを意味するからだ。

二つの「新シルクロード構想」（2）

しかし、一方で中国は「米国債を買い支えている」ことを外交カードにアメリカの首根っこを掴み掛けている。この綱引きがどのような結果を生むのか。この計画自体が1年や2年のスパンで計画されているものではないので、今後を予測するのは大変難しいが現時点からこの動きについてしっかりとウォッチする必要があるのではないだろうか。

話を身近なところに戻したい。ウイグル支援をしている私達が、この二つの中国主導による「新シルクロード構想」を解釈するうえでの重要なポイントは、この構想が確実にウイグルを、そしてそこに住むウイグル人の生活を現状よりもさらに困窮させ、ウイグルへの漢民族流入、同化政策を結果として一段と促進させるものであるということである。ウイグル人が経営する企業は、このような構想に関わることは出来ない。では、誰が利を得るのか。漢民族が経営する企業以外にない。大きなビジネスチャンスがあると分かれば、漢民族は大量にウイグルに流入する。そして、ウイグル人は経済的に追い詰められていく。本来ならばウイグル人のものであるべき土地で、漢民族が漢民族の為の事業を進めているのだ。紛れもなく、この構図である。

私は、個人的な意見として、中国への援助がこの構想に対して行われることに断固として「反対」の意志を表明したい。なぜなら、アジア開発銀行や世界銀行が融資を行う前提として「貧困撲滅」を第一義として掲げているからである。既に、生活に困窮するウイグル人が多く存在する中、この構想が進行されれば、前述の通りさらに多くのウイグル人が経済的に追い詰められていくのは明らかであり、国際的な金融機関の融資を行う目的と理念に真っ向から反することが容易に想像できるからである。日本国内からは、情報の少なさもあり懸念の声が上がらないが、いずれ、この件について何らかの形でアクションを起こす必要があると私は考えている。

アジア開発銀行の黒田東彦総裁は、この「新シルクロード構想」（それだけに留まる事はない）に非常に肯定的かつ積極的な考えを持っていると言われており、加えて副総裁の一人は融資を受ける側の中国から派遣されている趙暁宇氏である。これだけの下地が出来上がれば、どんなに矛盾に満ち溢れていても融資は行われる。中国が要望を行えば、その融資は実行されるという構図は間違いなく存在していると見るべきだ。総額で2兆円とも言われる「新シルクロード構想」における融資であるが、これで収まると考えるほうが愚かだろう。間違いなく湯水のごとく、中国に資金は流れる。

チベット方面、青蔵鉄道などでも、軍用列車が運用されている。鉄道は、直接的な支配力の面でも、重要な要素となる。（画像は 2009 年 7 月、ウイグル女性と対峙する治安部隊。）

このような状況を一つ一つ紐解いていくと、ウイグル問題を、人権問題などに限定した側面で捉えても、何が生まれるわけではなく、現実的にウイグル人を民族消滅の危機から回避させるソリューションを見出すことは出来ないことを強く感じる。

中国が、今後どのようなビジョンを持ってユーラシア大陸に、そして日本に、具体的にどのような経済的浸透、軍事的脅威を及ぼそうとしているのか。これについて、しっかりと認識していかない限り中国に対し効果的な牽制を加えていくことは事実上不可能であろう。

ユーラシアに覇権を拡大させる中国と、それに本質的には嫌悪感を抱いていても、その覇権に現状として楔を打ち込む術を有していないアメリカ。さらには、中央アジアでの資源確保を目論むロシア、そして前述の国際金融機関の存在や、関係国の経済界の意図という様々な要素と思惑が交錯する中で存在するのが、現状としての「ウイグル問題」である。このことをしっかりと見据えて、２０１１年はウイグルの為に、そして日本人として日本の為に何が出来るのかを認識し行動していきたい。

（担当：廣瀬）

ウイグルと仏教について概説

7世紀、西遊記のモデルである玄奘三蔵はシルクロードを経由して天竺に経典を求めて旅をしました。このシルクロードの舞台が現在の東トルキスタン（新疆ウイグル自治区）です。

玄奘の旅は「大唐西域記」として残されており、シルクロードの諸都市では非常に仏教が盛んであると記しています。

それから１０００年以上経ち、現在の東トルキスタンの住人であるウイグル人の大半はイスラム教徒となっています。しかし、今も東トルキスタンの各地に残る多くの仏教遺跡からも分かるように、かつては仏教が信仰され、華麗な仏教文化が花開いていました。

シルクロードは東西の交通や貿易の主要な幹線でしたが、東西文化の交流という点でも大きな役割を果たしました。西方の宗教であるマニ教、ゾロアスター教、ネストリウス派キリスト教などは、いずれもシルクロードを経由して東方に伝えられました。そして特に、日本も含む東アジアに大きな影響を与えたものが仏教です。

インドで始まった仏教は1世紀以降に現在の東トルキスタンに広がり、それが中国に伝わって、その後6世紀に日本へと伝わってきました。大乗仏教や主要な仏典、仏像などの仏教美術が成立した北西インドおよび、東トルキスタンも含む中央アジアで発展した仏教文化が、現在の日本の我々にとっても身近な仏教となっています。

仏像は1世紀にクシャーン朝があった北インドのガンダーラ、サーンチーで作られるようになったと言われますが、これはギリシャ彫刻などに見られるようなヘレニズム文化の影響が大きかったと考えられます。

同様に、多様な文化の重なりにあった東トルキスタンでも、盛んに仏像や仏画などの仏教美術が作られました。現在のアフガニスタンには大仏像で有名なバーミヤン遺跡がありますが、これに比較しても東トルキスタンの諸都市では更に多くの大仏が作られていたと言われています。

東トルキスタンに残る仏教遺跡や美術は、仏寺跡も各地に残っていますが、千仏洞にシルクロード仏教美術の絵画などが保存状態の良いままに残されています。千仏洞とは山の斜面に多くの洞窟を掘り、そこを仏像や仏画で飾ったものです。

トヨク溝千仏洞（ピチャン）
山の斜面に無数の洞穴が掘られ、内部には仏画・仏像が安置されている。

仏教は、釈迦入滅後に弟子の間で大乗仏教と上座部仏教とに分裂しましたが、いずれも東トルキスタンへと伝わり、それぞれの地で信者を獲得していました。

タクラマカン砂漠を挟んで北側には先に上座部仏教と後に大乗仏教が、南側には大乗仏教が伝わりました。

タクラマカン砂漠の北側、現在のクチャは上座部仏教、特に説一切有部の中心地であったと言われ、多くの経典が発見されています。またクチャのキジル千仏洞などには自己の悟りを得るために禅定が重視されていたことを伺わせる禅室跡や、釈迦の生涯を描いた仏伝図、釈迦の前世の物語を描いた本生図などが多く残されています。

しかし、同時期のクチャには大乗仏教の寺院があったことも玄奘三蔵によって記録されており、さまざまな文化や民族によって成り立つこの地域の多文化性、寛容性が伺われます。

タクラマカン砂漠の北側は上座部仏教の教勢が大きかったものの、次第に大乗仏教が盛んになったと考えられています。

タクラマカン砂漠の南側、現在のホータン（于闐国）は、この地域で最初に仏教が伝わってきたところであり、世界的にも大乗仏教の中心地の一つであり、多くの大乗経典が発掘されています。ストゥーパ（仏塔）を中心に配し、その周囲を回廊が囲む大掛かりな仏教寺院が建設されました。華厳経など現在でも重用な大乗経典の多くがこの地で編纂され、中国へと伝わっていきました。

中国の多くの求法僧らも、この于闐に来て学び、教えと経文とを持ち帰りました。

仏僧たちはインドの仏典を現地語に翻訳し、仏教の学習と布教に努めました。彼らの多くは2世紀中期以降、仏典を携えて中国に入り、中国の仏教の確立に多大な貢献をしました。中国で普遍的に広まった後に、仏教は朝鮮半島、日本へと伝えられました。

5世紀初頭にクマラジーヴァ（鳩摩羅什）という現在のクチャ（亀茲国）出身の人が、サンスクリットの大乗仏教経典を漢語訳しました。彼の訳経を用いて、聖徳太子は日本に積極的に仏教を取り入れました。彼の翻訳した経典は今でも「羅什訳」と呼ばれ重用されています。

また玄奘三蔵は唐の長安を出発しインドへと経典を求め旅をしましたが、その際に現在のトルファン（高昌国）やクチャ（屈支国）など東トルキスタンの諸都市を経由しており、それぞれの地で仏教が非常に隆盛であったと記しています。

この地域への仏教の伝播には3つの大きな波があり、インドから直接伝わってきたもの、一旦中国に伝わって現地で発展しそれが逆流してきたもの、チベットで発展したチベット仏教の順に伝わってきました。しかし、以上で観てきたように、仏教の発展史として見るときに重要となるのは、インドから伝わって来てこの地で発展し、中国、日本へと伝わって行った「北伝仏教」の流れになります。

東トルキスタンのタリム盆地に存在していた国家は、砂漠の周縁に存在するオアシスを拠点とした都市国家が集まってできたものであり、また北方から来るテュルク系・モンゴル系の遊牧騎馬民族の支配を受けたりしました。

「トルキスタン」とはペルシャ語でテュルク系の民族が住む土地という意味ですが、この地域が言語・文化的にテュルク化するのに大きな役割を担ったのがウイグル人です。

現在のモンゴル高原にあった遊牧ウイグル帝国が崩壊した9世紀に、ウイグル人が大量に移住してきて、天山ウイグル王国やカラハン朝を形成しました。彼らもまた仏教を信仰しており、それまであった仏教文化を一層発展させていきました。

この亡命してきたウイグル人が土地の先住民らと混血し、その子孫が今のウイグル人となります。シルクロードを経由して伝わってきた西方の宗教で、現在の東トルキスタンの住民のほとんどが信仰しているのがイスラム教です。10世紀頃より入って来たイスラム教を、まずはカラハン朝が受容し、それから東トルキスタンがイスラム化されていきます。東トルキスタンの西部は早くからイスラム教圏となっていきましたが、東部はしばらくの間は仏教圏のままであり、最終的に全域がイスラム化したのは15～17世紀のことと言われています。

つまり仏教が伝わった2世紀から12～13世紀までの1000年間は、東トルキスタンは仏教文化が支配的な地域であったのです。

イスラム教の浸透により、シルクロード仏教美術の仏像や仏画の目が消されるなどの部分的な破壊もありましたが、これは深刻なレベルのものではありませんでした。

20世紀初頭にはヨーロッパや日本など多くの探検隊がこの地を訪れ、大量のシルクロード仏教美術品を持ち帰りました。このことに対して中国政府は、探検隊が中国の美術品を盗んでいったと非難しています。しかしシルクロード仏教美術はウイグル人の先祖が形成したものです。

そしてシルクロード仏教美術の徹底的な破壊は、1960年代の文化大革命のときに、新疆ウイグル自治区に入ってきた紅衛兵によって行われました。

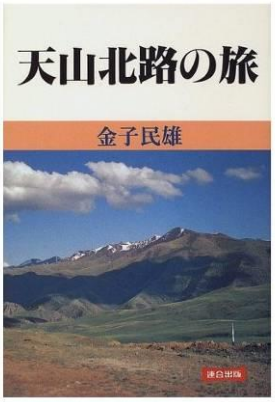
現存する仏教遺跡の代表的なものは、トルファンのベゼクリク千仏洞、トユク千仏洞、クチャのキジル千仏洞、クズルガハ千仏洞などがあり、日本人が好んで訪れる観光スポットとなっています。それと共に、既にイスラム教徒となったウイグル人も、日本人と同様に仏教遺跡に観光に訪れています。

現在、中国政府の圧力により民族独自の文化を奪われようとしているウイグル人にとって、彼らの先祖が開花させた偉大なシルクロード仏教美術は、民族の誇りとなっているのです。

（担当：佐藤）

東トルキスタンに伝わる壮麗な仏教美術（画像は2010年9月の協会主催講演会　「２世紀から１１世紀　東トルキスタン　タクラマカン盆地の仏教文化」講師：カイセル・オズフン氏）

書籍紹介



天山北路の旅
金子　民雄　著
連合出版

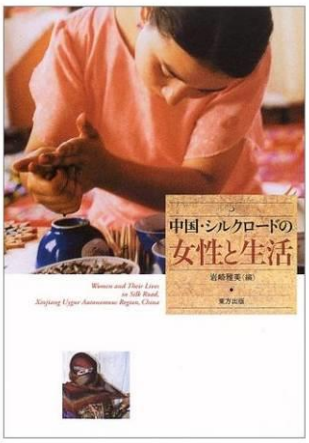
本書は歴史紀行であり金子民雄氏はウイグルの専門家ではありませんがシルクロード全般では有名な歴史家です。

本書は１９９５年に書かれウルムチを起点として天山北路を通りグルジャ、カザフスタン、キルギスタン、そして最後にカシュガルに至る経路を記述しています。

著者の関心は歴史でありウルムチにはそれほど触れてはいません。ウルムチより天山北路を通りグルジャに行く過程では西徳二郎について書いています。西徳二郎は北清事変時の公使として知られており、１８８０年にこの地を訪れています。この年はいわゆる「ヤクブベクの乱」より３年しか経過しておらず、当時はロシアがグルジャを占領し、ロシア、清国が天山北路で対峙していました。西徳二郎は天山北路に行った最初の日本人かもしれません。

グルジャは「豊穣の地イリ」として１章を使っています。グルジャの豊穣さ、美しさに触れていると同時に「同治回乱」の民族間の衝突、陰惨さについて書いており２年後に起こるグルジャ事件を予感させます。また著者がカザフスタン入国直後に呉弘達氏がウイグルに入ろうとして逮捕されたそうです。呉弘達氏を講演などで知っている方もいるでしょう。キルギスタンではイシッククル、李白、玄奘三蔵について書かれていますが、気になる記述として現地日本語教師の証言として中国核実験の「死の灰」が降り現地の人たちが神経を尖らせていることが書かれています。書評ではふれませんがセミョーノフ、プルジェワルスキーなど１９世紀の探検家についても書かれており興味のある方には楽しめると思います。

歴史紀行が政治色を帯びるのは中国ならでは。著者は大学ではなく民間の研究者なので多少踏み込める面があるのでしょう。著者が講演で中国の恐ろしさは人口であるといったのが非常に印象に残っています。



中国・シルクロードの
女性と生活
岩崎　雅美　著
東方出版

ウイグルに関しては政治、歴史、旅行記、写真は多く書かれているが生活について書いた物は少ないのではないかと思います。

本書は１９９９年から２００３年にかけてカシュガル、グルジャなどを中心としてウイグル人の生活調査が書かれています。中国の許可を得た上での調査の為、比較的裕福でイスラム色の薄い家庭を対象として生活全般について扱っており、出産、教育、結婚、離婚、日常生活など詳しく触れています。

食生活にも１章が使われており日本にはまだ関東を中心として４店舗しかないウイグル料理を目で楽しむことができます。服装については女性が対象ということもあり写真が多く掲載されています。ウイグル女性の服はアトラスと呼ばれる原色を使った虹のような派手な服ですが彼女たちにはとても似合っており美しいです。化粧は濃い眉毛が好まれておりオスマという薬草の汁を塗るが、育毛効果などがあると言われており気になるところです。

服装など身の回りの物についてはウイグル語での名称も２ページにまとめてあり興味のある方にとっては便利です。服装以外にも住宅の構造、内装、などの説明、写真がありウイグルの室内装飾について書かれている本は日本では少なく、他には杉山徳太郎氏の「維吾爾絨毯文様考」、「ホータン手織絨毯選集」などウイグル絨毯の本ぐらいでしょうか。本書は裕福な家庭が対象のため貧しい家庭、トルコ、カザフスタンなど海外に居るウイグル人との比較も是非知りたいところです。中国政府はウイグル人の伝統的な文化、家庭を破壊しようとしていますが制約の少ない海外でどうなのでしょうか？最近トルコのカイセリに行った方の調査ではウイグル人居住区で服装など一見するとトルコ社会に同化しているように見えるがウイグル人家庭に入って見ると食生活、ウイグル語などウイグル人の特徴を保持していると報告されています。

現地のウイグル人と海外のウイグル人が連携、協力し合ってウイグル文化を残して行ければと思います。

（担当：ムシュク）

「黙殺される真実をＡＰＥＣに問う　平和集会」レポート

ＡＰＥＣ開催を前に横浜の街は緊迫した雰囲気に包まれ、横浜市内至る所には、全国から派遣されてきた警官が、真剣な面持ちで歩き回っていた。

去る１１月６日（土）横浜情報文化会館・情文ホールにて、午後四時から「黙殺される真実をＡＰＥＣに問う平和集会」を開催した。集会参加者は１４０名ほどであった。

午後四時の開場から、２００８年４月長野聖火リレーの際に、初めて東トルキスタン国旗を掲げて抗議行動を行った映像、チベット難民の厳しい現実を描いた映画「ヒマラヤを越える子供たち」を上映した。

午後五時に開会、まずはウイグルにおける核実験の被害を訴えた「DEATH ON THE SILKROAD」の上映を行った。

開会直後、DEATH ON THE SILKROADの上映。
真剣に見入る参加者ら。

2010/11/6

その後、日本ウイグル協会会長のイリハム・マハムティによる挨拶、五時四十五分頃から、議員・ジャーナリストの方々によるリレートークが行われた。

リレートークは、神奈川県議会議員・日本会議議員連盟会長の松田良昭議員、同じく神奈川県議会議員の小島健一議員、チベット文化研究所所長・横浜桐蔭大学教授のペマ・ギャルポ氏の三氏が登壇された。

後半はジャーナリストの西村幸祐氏、拓殖大学客員教授の石平氏、ノンフィクション作家の関岡英之氏、東京都議会議員の吉田康一郎議員の四氏で、飛び入りでジャーナリストの山際澄夫氏が登壇された。

西村氏の依頼により同氏の登壇の前に、巷を騒がせている「尖閣諸島衝突動画」の上映を行った。

集会の最後は、協会メンバーによる集会決議文を読み上げ、拍手によって参加者の賛同を得るという形で締めくくられた。

集会が開演してから上映された「DEATH ON THE SILKROAD」は、インターネット上にアップロードされているものを既に視聴した参加者も大勢いたのであろうが、それでも皆真剣に食い入る様に見ていた。

公安当局に拘束されるリスクを負い、旅行者を装って行われた、ウイグルにおける核被災状況の潜入取材。

現地の医師への取材、極秘資料の入手など、隠密調査を続けていくうちに、真実が次第に白日の下にさらされていった。中国共産党政府の核実験の実施規模と比例して増加している、ウイグルの白血病患者、奇形の子ども達、というこの事実に対し、中国政府は「核爆弾の被害はない。ウイグル人の被爆者はいない。」と言い放っている。

中国政府が隠ぺいし続ける、ウイグルでの核実験と放射能汚染については、そこに住むすべての人が知っており、また医師も知っているのにもかかわらず、抗議を上げること自体が出来なくなっている。この事から明らかな様に、中国共産党政府の掲げる「民族和階社会」という言葉は上辺だけで、実際は「胡説八道（でたらめ）」である。

登壇された方々のお話の内容は、今後の日中関係に関するもの、現在メディアを騒がせている尖閣衝突事件の流出映像について、といったものが主であった。

緊迫する日中関係について、ペマ・ギャルポ氏は「中国に正しいことを主張しても、あまり効果はない。彼らは真実とは縁遠い国である。彼らの文化は捏造。そして力を一番信じている」と話され、ノンフィクション作家の関岡英之氏は、中国共産党が政治的戦略として実施している「三戦（法律戦・心理戦・世論戦）」を我々も利用して、中国に対抗していかなければならないと説明した。尖閣衝突事件の流出画像を巡っては、登壇者の方々は共通して、「映像流出犯人探し」を徹底批判されていた。松田良昭議員は、この画像流出の件について「内部告発」とし、「領土・主権の侵犯」こそ問題と批判。同じく西村幸祐氏も、真実を報道できない既存のマスコミの情報統制を強く批判された。

登壇された方々の御話に参加者から拍手が度々沸き起こり、盛況の中で締め括りとして、本平和集会の決議文の読み上げと、拍手による賛同を経て、今回の集会は幕を閉じた。今後私も、中国共産党によって「黙殺された」ウイグルの数多くの真実を白日の下にさらすため、微力ながらも活動をしてゆきたい。（担当：Ｉ）

ウイグル料理紹介

ウイグル風野菜春雨サラダ（3～4人前）

材料

人参1本、ピーマン2個、赤ピーマン1個、ほうれん草適当、春雨100グラム

調味料

塩、こしょう、山椒、味の素、醤油、唐辛子粉、黒酢、サラダ油

作り方

まずは野菜を洗って人参、ピーマンと赤ピーマンを千切りにし、ほうれん草は3センチくらいの長さで切る。

野菜の準備が終わったら、春雨をお湯で戻し、冷たい水で冷やした後、器に入れて、準備しておく。

千切りの野菜とほうれん草を器の中の春雨の上にのせた後、その上に塩、こしょう、山椒、醤油、唐辛子粉、黒酢、サラダ油（好みで味の素）を適量掛けて良く混ぜ、5分位置いて置けば出来上がり。

さっぱりした味で、ご飯などにもぴったりです。

（担当：イリハム）

盛り付けたサラダ。白い春雨に緑のほうれん草とピーマン、赤ピーマンにオレンジ色の人参と彩りも鮮やか。

編集後記

○明けましておめでとうございます。昨年は後半にかけて、劉暁波氏のノーベル平和賞授賞や、尖閣問題など、中国関連のニュースを多く目にしました。○毎年の事ながら、今年こそ、ウイグルにとって最高のニュースが聞けないかと思ってしまいます。○何度か取り上げているアジア開発銀の問題、核すら保有している国家に財政赤字を抱える日本から資金流入、素人ながら理解しがたい事です。○本年も、精進してゆく所存です。協会と「蒼空」を、宜しくお願い申し上げます。（編集：「ぬ」）

特定非営利活動法人
日本ウイグル協会
Japan Uyghur Association

日本ウイグル協会
公式サイト
http://uyghur-j.org/

メールアドレス
info@uyghur-j.org

投稿募集中！

引き続き、会員の皆様からの投稿を募集致します。ウイグルを取り巻く状況についてのご意見や、今後の活動についてのアイデアなど、ウイグルに関する事なら何でもお寄せ下さい。要項は左記の通りです。

・400字詰め原稿用紙換算で1～2枚程度
・本名掲載の可否、若しくはペンネームを明記（ない場合は一律「匿名希望」とします。）
・原稿の返却は致しません。
・趣旨を変えない範囲で編集を行わせて頂く場合があります。
・なるべく沢山の方の原稿を掲載出来ます様努力致しますが、ご期待に添えない場合があります。
・締め切りは、会報発行月（1・4・7・10月）の、前月10日消印有効です。（メールは15日）
・協会アドレス宛てにメールでお送り頂くか、私書箱宛てに封書にてご郵送下さい。

アドレス　info@uyghur-j.org
私書箱
〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-1-39
恵比寿プライムスクエア1F MBE521
特定非営利活動法人 日本ウイグル協会
「蒼空」編集部「会員の声」係